2022年8月21日  川越教会

丸山　勉

遅くならない救い

［ダニエル書1章10～21節］

「侍従長はダニエルに言った。「わたしは王様が恐ろしい。王様御自身がお前たちの食べ物と飲み物をお定めになったのだから。同じ年ごろの少年に比べてお前たちの顔色が悪くなったら、お前たちのためにわたしの首が危うくなるではないか。」ダニエルは、侍従長が自分たち四人の世話係に定めた人に言った。「どうかわたしたちを十日間試してください。その間、食べる物は野菜だけ、飲む物は水だけにさせてください。その後、わたしたちの顔色と、宮廷の肉類をいただいた少年の顔色をよくお比べになり、その上でお考えどおりにしてください。」

世話係はこの願いを聞き入れ、十日間彼らを試した。十日たってみると、彼らの顔色と健康は宮廷の食べ物を受けているどの少年よりも良かった。それ以来、世話係は彼らに支給される肉類と酒を除いて、野菜だけ与えることにした。この四人の少年は、知識と才能を神から恵まれ、文書や知恵についてもすべて優れていて、特にダニエルはどのような幻も夢も解くことができた。ネブカドネツァル王の定めた年数がたつと、侍従長は少年たちを王の前に連れて行った。王は彼らと語り合ったが、このダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤと並ぶ者はほかにだれもいなかったので、この四人は王のそばに仕えることになった。王は知恵と理解力を要する事柄があれば彼らに意見を求めたが、彼らは常に国中のどの占い師、祈祷師よりも十倍も優れていた。ダニエルはキュロス王の元年まで仕えた。」

 [１] 「ダニエル書」という書物

今日から旧約聖書の「ダニエル書」を礼拝の中で一緒に味わいます。私が川越教会で仕えるようになってからこの箇所を通して取り上げるのは初めてではないかと思います。ですので私自身も今この時ダニエル書を読み直すのを楽しみにしています。これは旧約聖書の中では珍しい「黙示文学」と呼ばれるものです。まあ「預言書」の一つとして旧約聖書の中に置かれていますが、神様からの言葉を預かり、語る「預言者」と言うよりも、特に後半では、象徴的な表現で未来のことを「幻」のように語っている、新約で言えば「ヨハネの黙示録」にも通ずる書物です。なぜそのような象徴的は表現で語られているのかと言いますと、迫害下の中にあった信仰者たちが、この暗号のような文書によって励まし合うためです。

今日は第１章です。この「時」について、「バビロンの王ネブカドネツァルが攻めて来て」(1:1)とあるように、バビロン捕囚の時代となっていますが、実際にはその時代を舞台としながら、新約の時代も近い、更に信仰者が理不尽な苦しみを味わうような時代の中で、「ダニエル」という人物の名を借りて書かれた書物であるようです。ですから特に後半「幻」の描写も多いのですが、大きなテーマとしては「信仰者はなぜ苦しみを味わうのか。その答えはあるのか」というものです。

その意味ではあの「ヨブ記」と近いです。「なぜ、故なく人は苦しまねばならないのか。神は沈黙しているのか」です。「ヨブ記」は本当に壮絶ですね。40章まで神様は一言も言葉をおっしゃっておられませんから。でも、ある意味それはとてもリアルですね。私も肉声で神様の言葉を聞いたことはありません。こちらの都合よくは答えては下さらないですよね。（PCやスマホの方が友だち代わりになってくれることがあるかもしれませんね）。確かに神様は私たちの「祈り」に耳を傾けて下さっていると思います。しかし、それにすぐ答えて下さるかどうかは分かりません。神様の答えが遅い！と思えてしまう。早く、早く、ここから具体的に助け出して下さい！と思う。けれど今は沈黙しておられるように思えてしまう…。

[2] 私たちの信仰の拠り所は何？

人生には過酷な状況がやって来ることがあります。ダニエル書のダニエルもそうでした。彼はユダヤ人でしたが、容姿端麗で教養もある、体力も備わっている人物として描かれています。時の権力者はそのような人物を（人物だから）利用しようとしたのです。このような人物で脇を固めたいと。ダニエルのほか、3名の仲間たちの名が記されています。ハナンヤ、ミシェエル、アザルヤです。彼らは、かの地では自分の名も消されました。7節に「侍従長は彼らの名前を変えて、ダニエルをベルテシャツァル、ハナンヤをシャドラク、ミシャエルをメシャク、アザルヤをアベド・ネゴと呼んだ」と書かれています。ここではユダヤ人とは見なされない。名前の剥奪。これは殺人にも近いアイデンティティーの喪失ですね。しかもユダヤ人は、もともと信仰共同体ですから、主なる神様を否定され、偶像の神の方に仕えるように仕向ける屈辱的なことに違いありません。恐らくこの時ダニエルたちは15才程だっただろうと言われます。彼らは自分に降りかかってきたその運命を呪ってもおかしくはなかったと思います。

しかし大事なことは、ダニエル書は、運命を呪う生き方ではなく、この艱難や試練、不条理の中で、なお神様に信頼し信仰を貫く生き方を私たちに告げています。ダニエル書の最後の言葉はこうです。口語訳ですが、「しかし終りまであなたの道を行きなさい。あなたは休みに入り、定められた日の終わりに立って、あなたの分を受けるでしょう」（12:13）。これは命令であるとともに、励ましでもありますね。神様からの天使がダニエルにこう語られたのです。私たち新約の時代に生きる者には主イエス様がこう語られます。―戦争のうわさも耳にし、様々な環境的異変、また迫害の危機も起こる―「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(マルコ13:13)と、「耐え忍ぶ者は、救われる」というお約束も語っていて下さっているのです！

今日本の国では信仰（信教）の自由が保障されています。日本国憲法に明記されています。これはもちろん、かつての戦争の反省から来ています。国家神道がある意味マインドコントロールのように作用して、一億火の玉のように熱にうかされ、多くの命が失われ、また、ずっと傷を抱えながら生きて行かなくてはならない人々を生み出しました。「信教の自由」とは、ひとつの思想を絶対化した戦争の反省から生まれた信仰の相対化です。これは大切なことでしょう。

しかしその上で考えなければいけないことは、私たちは、公に信仰の自由が守られているから信仰を持っているのでしょうか、こうして礼拝を捧げているのでしょうか。そうではないと思います。自由に信仰生活が送れることは恵みに違いありません。しかし、そうでない状況になったとして、あなたはなお礼拝を守ることが出来るかどうか、そういうことが問われていると思います。私たちの信仰の拠り所は「国家」なのか、「真の神様」なのか、ということです。

私は今日の箇所で、ハッとしたことがあるのですが、このバビロン王ネブカドネツァルに仕える侍従長が「わたしは王様が恐ろしい」と言っている所です。そんなことを少年ダニエルに吐露しています。恐怖政治がそこにあった。権力者に仕えていれば安心、ではないのですね。むしろ精神はビクビクして不自由です。「お前たちの顔色が悪くなったりしたら私の首が危うくなる」（10節）と言っています。こんなこと言われてもダニエルも困ると思います。何せ顔色ですから。どう転ぶか分からない。けれど、何と堂々としたダニエルの言葉でしょうか！12節。「どうかわたしたちを十日間試してください。その間、食べる物は野菜だけ、飲む物は水だけにさせてください。その後、わたしたちの顔色と、宮廷の肉類をいただいた少年の顔色をよくお比べになり、その上でお考えどおりにしてください。」

考えてみるとこの申し出は、ある意味愚かで危険な申し出とも言えます。10日間野菜と水だけで結構です、それでもピンピンしていますからと言い切ったのです。「宮廷の肉類」を経つというのは、神殿の偶像に献げられた食物を食べるとはそれと一つになることであり、この異国で、そこの‟神”と呼ばれるものにノー！と言ったということです。強い信仰と言えば強い信仰ですが、これは彼らの熱心さと言うよりも、私は、新約的に言えばこれを言わしめたのは聖霊だと思います。聖霊に捕らえられる時、語る言葉も神が与える、とイエス様はおっしゃいました。ダニエルには三人の仲間がいました。この存在もまた大きかったと思います。独りで葛藤し、決断したというよりも、ここには苦しみと祈りの共有があったと思います。信仰の自由が脅かされる現場で、二人また三人が主の名によって祈ったのです。ここに「教会」があるのではないでしょうか。そして、この三人、再来週見る箇所では、火の炉に投げ込まれても彼らに火は及ばないという奇蹟を経験し、ネブカドネツァル王がむしろ「まことに人間をこのように救うことの出来る神は他にない」と、主なる神をたたえるような言葉を発しています。（3:29）。

[3] 完全な愛は恐れを締め出します

このシャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人もそうですし、ダニエルもそう、彼らの信仰というのは、実に「恐れなき」信仰です。王を‟恐れていた”侍従長とは対照的です。新約聖書のヨハネの手紙一にこうあります。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します」（4:18）。―「完全な愛」。主イエス様が十字架で私たちの身代わりとなり、死に、三日目に甦って下さって、もはや墓が私たちの最終地点ではなくなった神様の愛のみわざのことです。この愛に捕えられる時、私たちは孤独ではないと思います。「自分への救いが遅い…。神様は黙ったままだ」とはもう言えなくなったと思います。何故なら、どんな時も「わたしの時は主の御手の中にある」（詩編31:16）ことを知ったからです。私の過去のどんな時も、主の愛と赦しの中にあり、今も生ける主・聖霊が私を捕らえ、これからの時間も、時を作り私を作って下さった「神様の時」の中に責任をもって導いて下さる。そのことを、私たちは、ある意味、愚か者のように信じて良いのだと思います。招きの聖句で読んだへブル書の言葉のように、神様の救いは、決して、遅くなることはないのです。

20世紀半ば、ナチスドイツ暗黒の時代、抵抗運動に加わったということで死刑になった著名な牧師・神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーは、逮捕され獄中にいたのですが、イースターの翌週の日曜日、仲間の囚人に乞われて礼拝の司式をしていたところを連れて行かれ、その翌日に処刑されました。主イエスに最後まで信頼し、礼拝を捧げて死んだということです。その彼が処刑される直前、このように語ったという報告が残されています。―「これが最後です。私にとってはいのちの始まりです」と。主イエスの故に、この希望が私たちには与えられているのです。お祈り致します。

主なる神様、今日ご一緒にあなたの御前に出ることが出来て感謝致します。どうぞお一人ひとりの信仰の歩みを祝福し、護り、また試練の時にはあなたご自身が私たちの存在そのものを支える力となって下さいますように。詩編の詩人が「たとえ死の陰の谷を行く時にもわざわいを恐れません。あなたが共にいて下さる」（詩編23）と歌ったように、私たちにもいかなる時にも望みを失わないその信仰の幸いをお与え下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。